

**B**

RICSの一角を担っているブラジルの驚異的な経済発展の陰で、多くの日本人移民が主に農業分野でブラジル経済を支えてきたことは、多くの日本人が知っている。しかし、その歴史が100年に及ぶ日本人農業移民の壮絶な開拓の歴史であったことを知る日本人は今や少なくなってしまう。

戦前ブラジルに入植していた親戚の叔父さんが少年時代の私にブラジルの素晴らしさをよく話してくれた。「お前は俺の代わりに将来はブラジルに行け！」と叫ぶのである。その話の中に出てくるのが叔父の大学の先輩、平賀練吉博士である。戦前には、叔父さんも平賀博士と同じ時代にアマゾンに移住したとのことだった。

私が大学の研究室で木材資源の研究をしていた40年前の遠い昔の話だが、実験に行きつまたった時に何故か叔父の話を思い出して無性にアマゾン川を見たくなった。サンパウロからバックパッカーとしてアマゾンに行つたが、その後はパラ州のベレン経由で日本人入植地であるトメアスに入った。

叔父さんから大事に預かってきた紹介状を携えて粗末な貨物船でトメアスの港にたどり着いた。港からは徒歩で近所の子供に先導されて平賀博士の家を訪ねて行ったのである。

奥から顔を出された平賀博士は紹介状を読むと、優しい眼差しで「食事でもして行きなさい」と家の中に招いてくださった。トメアスといえばピメンタ（黒胡椒）で有名な入植地である。平賀博士は戦前、入植者に農業指導するためにコロンニア（ブラジルの日系社会）に求められたという。当時、臼井牧太郎博士がマレーから数本持ってきた苗がアマゾンで日本人の手によって大胡椒農園に発展したので。

平賀博士は研究者然とした方で、コロンニアの人のために一生をかけてピメンタと農産物生産の研究に打ち込まれた。戦前の日本人開拓団は、劣悪な環境の入植地を与えられたため、熱帯性の風土病で命を落とすケースが多発した。

平賀博士は戦前、東京帝大農学部で学生の時にアマゾンに農業支援と熱帯植物の研究のために入植されたが、移住者の苦しんでいる姿を見て移民とともにそのまま住みついてしまわれたのである。苦勞の末、ピメンタの栽培は成功して、地域の基幹産業として税収を潤すようになった。

実は平賀博士は阪急電鉄の創業者である小



## AROUND THE WORLD

# 山師の手帳

中村繁夫 Shigeo Nakamura

### 第31回 ブラジルの土となった平賀博士

写真・生津勝隆 Masataka Namazu



2008年ブラジル移民100年を記念して

林一三の第六子であることが帰国後に分かった。稀代の遊び人で、偉大な実業家であった小林翁は子沢山であったから、一人ぐらい自分の子供をブラジルに移住させても良いと思ったのか、それとも平賀博士が自ら移民となることを決意されたのかは分からない。

これも後日談だが、なぜ博士が小林姓ではなく平賀姓なのか不思議に思ったので「小林一三伝」を読んでみたら、三井物産時代に重要な影響を受けた阪急の社員に平賀敏（第2代阪急社長）という人の存在が分かった。平賀家の養子になった経緯は何か訳ありなのだろうが、今となっては調べる術はない。

今年「W杯」がブラジル全土で行われている。多くの日本人サッカーファンたちもブラジルに行くことだろう。経済動向を見ると資源ブームが一巡して大資源国家であるブラジルの景気が落ち込んで見えるように見えるが、これは一過性の現象だと私は考えている。ブラジルが底力を発揮するのは時間の問題である。未来の大国ブラジルには多くの顔があるが、日本人が100年にわたってブラジルの農業の基礎を築き上げたことを忘れるべきではない。

なかむら・しげお レアメタル専門商社、アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。日本におけるレアメタルの第一人者。世界100カ国を訪問し、世界制覇を目指す。